開業醫

『貴君、車がまゐりましたよ』

音聞きつけて細君が云ふ。がらがらと曳き入れた車は玄關の前に止った。

薄暗い部屋に、暫らくは音もたてず、丁寧に、洋服を着替へて居た菊井は、やがて壁にかけた鏡の前に立って、襟飾を直し、髪にはも一度櫛の齒を入れて部屋を出た。

細君は絹切れで、せっせと長火鉢の縁を拭いて居た。塵を中に、疊み込んでは拭き、廣げてはまた疊んで拭く手許を見ながら、其處にあった赤羅宇の煙管をひきよせて一吹つける。そこへ薬局に居た義弟の太一がはいって來て、

『あの、仲町の木曽谷から直ぐ來てくれって來ました』

『ふむ』

疾くに承知とも聞えるやうな返事して、また一吹つけたが、それはすっぱすっぱと飲んでしまって立ち上った。手下げは玄關に出てあった。犬にかまって居た車夫は氣はひに飛んで來て膝掛けを肩にかける。門の前には男の子守が、體を左右にふり乍ら、唄を小聲に眺めて居る。筋向ひの宿屋の二階には、肩當ての極く目にたつ寢巻を着た客が、欄干に手をついて瞰下して居る。

通りがけの病家も一軒、愛想よく切り揚げて、車は又年暮に忙しい街を走って居る。電柱に張りつけた賣り出し廣告、赤い圈點も景氣宜く、諸々な出店出店の賑かさ、車夫の呼聲に、慌てゝ飛び退く人々の顔を頓馬とでも言ひたげに、菊井らは即ち傲然と構へて居た。

車の歩みが緩くなった。ふと氣が付くと木曽谷の店先には、美しい、車が一輛止って居る。

不安の念は、車の背に、小さな三つ柏葉の紋を認めるや否や、激しく胸を打った。

火鉢を挾んで其處に居た二人の車夫は、梶を下す車夫に笑顔で會釋して、目をそばたてて眺めて居る。

惡るびれずに宣告を聞きに往くと云ったやうな心でずっと奥に通ると、そそくさ出向へた主人が

『お待ち申して居りやした』

と先に立つ。

『やあ』

聲は先ず座って居た人から掛った。

『お待せ申しましたさうで……失禮しました。』
『いえ、ああ、如何です、お忙しいですか』
『え、なあに、はゝゝ』
菊井は苦笑せざるを得なかった。
氣心の知れぬ先輩を憚る心と、新進の技倆を惶るゝ不安の胸とは、茲に暫時の沈黙を釀した。煙草は絶えず煙に縺れて居る。主人はやをら膝を進めて、
『何ですな……その、手前でもあまり熱が退けやせんので……年寄達が極く氣を揉むもんですから、今日小針先生にも御診察頂いたやうな譯でして……その何ですな、お見立てはどちらも同じものなんでせうか如何か、そこの處を一つ……』と頭を掻いて、
『御相談して頂きたいと思ひやして實は、お迎へ申上げたやうな譯なんでした……はい』
『はゝあ……さうでしたか』
自分にも此言葉はあまりに白々しく響いた。が、小針醫學士は頓着せず、
『あゝ只今診察しましたがな、褥熱……ばかりでは無いやうに思はれるやうですが、蜂窩織炎の……つまりまあ熱と熱とが衝突したので恁んなに非常な発熱を來したのでせう……随分非常な熱ですな！』
『えゝ弱ります、恁う續かれちゃあ』
温度表を見て居た菊井ははっと此場合、弱いことを言ったと後悔した。同時に不安の念は見る見る、嫉妬嫌惡の情を包んで、胸に廣がった。
また一人、患者を奪はるゝ恐惶である。
町は三月程前に、花々しく故郷に開業した小針醫學士を歡迎した。同情した。日々の患者は、廻診時なる午後にも押しかけると云ふ。爲めに、今迄隆盛を擅にして居た郡立病院も、此頃滅切さびれて來たと云って、人は益々小針醫院に集まって行く。醫學士の稱號は町の人に、薬のきゝ目を信ぜられたので、尤も病院長とても學士であったけれども。
兎に角、近村から此地に出て開業して、郡立病院以外に、可なりの患者をあつかって居た菊井は、此頃玄關に拔く下駄の數の少なくなったと共に、病家の一二軒から、病人かつけの斷りを喰ったのであった。
『ではそういふことにして……頓服は止して解熱剤は常薬にするやうに相談したから、薬はやはり菊井さんの方から……』
『は』

と主人(あるじ)は物足りなさそうな顔、菊井は凝乎(じっ)と其横顔を見詰めて居た。
『兎に角明日また來て診ませう、では失敬します！』
如才の無い取り廻しを、面憎く思ひ乍ら、
『失禮します！』
何氣なく。
家内の者はそれとばかりに送って出る。車夫は待って居て靴をはかせる。やがて二人曳(にんびき)きは勝(いさ)ましく驅け出した。
障子の手かけに張り込めた萩の葉を、煙草をふかしながら眺めて居(を)ると、主人(あるじ)はもとの座にかへった。
『なかなか如才がありませんなあ』
強ゐられた嘲りの笑は口許にのぼった。
『はア、なかなかもって……』
主人(あるじ)は何とも返事が仕兼ねたらしい。後は咳にまぎらしてしまった。
暫くまた話が杜絶(とだ)えたが、菊井はやがて種々(いろいろ)と看護上のことを注意して立ち上った。
はかうとする時になって、娘は慌てゝ靴を直した。雇ひ車の、さまで世話焼かずとも宜(い)い理由(わけ)があるのだから、車夫は店に寢そべって居た。自分で手下げを持って、態(わざ)と悠々と肩をあげて歩いたが、内心は非常に恥かしかった。

人の世の戰ひの聲は街に騒々しい。亂れた頭腦は矢庭に興奮して、何處かにひそむ恐惶(おそれ)を勵(はげ)ますやうに、
『戰はねばならぬ！』
と心に叫んだ。
車は受持ちの遊廓地さして走って居る。

底本：「水野仙子全集」第一巻
初出：「文章世界」明治四十年十二月
テキスト入力：小林　徹
公開：平成二十九年九月一日
リンク：水野仙子ホームページ